

## 第10章 特論5. 米子平野における古墳時代前期の小古墳群の検討

### はじめに

古市宮ノ谷山遺跡では、尾根上に連続して築造された古墳を計10基検出した。これらの古墳は古墳時代前期から中期にかけて築造されたものであり、規模は10m前後と小さく副葬品も少ない。山陰地方は古墳時代前期において、その象徴ともいえる前方後円墳・後方墳があまり展開しない地域であり、こうした小古墳といえども弥生・古墳移行期の研究に重要な資料といえる。

本稿では古市宮ノ谷山遺跡の小古墳群の様相に類似した、日野川西岸の青木遺跡F地区古墳群<sup>(註1)</sup>、日野川東岸の日下古墳群<sup>(註2)</sup>と比較し、米子平野における前期の小古墳群の様相について述べたい。

### 1. 各古墳群の様相—墳形と配置— (図152)

#### 青木遺跡F地区古墳群

青木遺跡は、日野川と法勝寺川に挟まれた長者原台地の平坦面に展開する弥生時代から古代にかけての大集落として著名である。その中でも、西側の標高約30～40mの小台地の1つであるF地区の西部及び北部で方墳10基、円墳7基の計17基の古墳が検出されている。

周溝内出土土器など時期判定が不安定な資料であるが、いずれも青木遺跡編年V・VI～VII期あたりに属し、規模は10数mほどで、周溝で区切り、わずかに盛土を施す構造である。埋葬施設は組み合わせ式の石棺や木棺で、副葬品は少ない。古墳の多くは丘陵平坦部に立地しているが、尾根筋または斜面に立地しているものもある。この尾根筋、斜面に立地しているものとしては、北に展開するSX03・08・09、北西方向に展開するSX04～06があり、これらは時期が下がると、その位置も下方へと展開するようである。また、この古墳群は方墳と円墳とで立地が異なる。方墳は先述した尾根筋、斜面または丘陵平坦部の縁部に展開するのに対して、円墳は縁部から平坦部に展開する。報告書ではこうした分布からA～Dの4つの群に分けており、さらに展開の仕方や副葬品組成からA・BとC・Dの2つの大きな群に分けている。前者の群はSX01～08の方墳7基と円墳1基、後者の群はSX09～17の方墳2基と円墳6基である。

#### 日下古墳群堂平地区「北・中央尾根」

日下古墳群は、日野川東岸の大山西端部の丘陵上に立地する。その中でも標高約70～90mほどの東から西へ向る堂平地区の丘陵では、米子市教育委員会によって約40基ほどの古墳が調査されている。これらの古墳のうち、「北・中央尾根」に位置するものは、4世紀中葉頃(青木遺跡編年VII期古段階)から5世紀前葉頃(青木遺跡編年VIII期)の年代が与えられている。古墳の規模、構造、埋葬施設や副葬品などの特徴は、先述した青木遺跡と類似している。いずれも丘陵の斜面上に築造されているが、出土物が少ないため、高い位置から順に築造されたかどうかは不明で



1. 古市宮ノ谷山遺跡
2. 青木遺跡
3. 日下古墳群(堂平支群)
4. 石州府古墳群
5. 日原6号墳
6. 菅段寺1・2号古墳

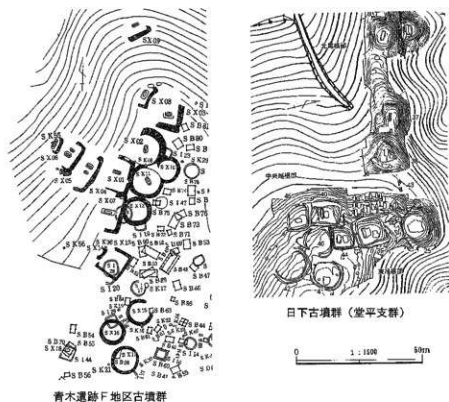
図151. 米子平野における前期古墳の分布

ある。

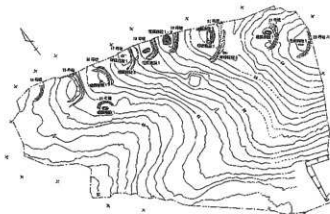
中央尾根部では、まず25号墳がⅦ期古段階に築造され、その後は25号墳より高い位置に古墳が築造されている。しかし、調査地外である北東方向へ展開する可能性や、25号墳の年代を決めている土器が同溝内埋土から出土していることなども考慮に入れる必要がある。

北尾根部ではさらに築造時期がはっきりしない。時期を示しうる資料が出土しているのは35号墳と37号墳のみで、しかもいずれも墳丘や周溝内からの出土であり、良好な出土状況とは言えないが、報告書の年代観に従えば、下方に展開するものが新しいようである。

古墳の墳形に関しては北・中央尾根部と東尾根部で大きく差がある。東尾根部は北・中央尾根部と同様にⅦ期以降に展開し、22基全てが円墳であるのに対して、北・中央尾根部では方墳8基、円墳3基である<sup>(28)</sup>。報告書



青木遺跡F地区古墳群



古市宮/谷山遺跡

※ 北は真北を示す

図152. 各古墳群の配置

ではこれらの差異を集団差として考えており、さらに後述する埋葬施設などのあり方から、より小さな集団までも想定している。しかし、それぞれの集団が完全に独立していたわけではなく、常に幾つかの集団が併存し、お互いに影響しあっていることまでも想定している。

### 古市宮ノ谷山遺跡

古市宮ノ谷山遺跡では、築造年代を示すと思われる資料がいくつか出土している。20号墳の埋葬施設2では土器枕が出土しており、Ⅶ期古段階に比定される。15・16号墳では周溝内からまともな須恵器や土師器が出土しており、それぞれⅢ期、Ⅶ期に比定されている。少なくとも20号墳以西の古墳に関しては、古墳時代前期から中期にかけて上方から順に築造されたものと考えられる。しかし、22・23号墳は年代を示す資料がなく、20号墳より古いという証拠はない。20号墳と22号墳との間に広い平坦面がある点など、青木遺跡や日下古墳群で見られるように別の群として捉えられる可能性もある。

墳形については、15・18・19号墳が方墳で、あとは円墳である。方墳の築造される時期としてはⅦ～Ⅲ期あたりと考えられる。青木遺跡や日下古墳群ではⅦ～Ⅲ期に方墳が築造され、いずれも古墳群全体の中で分布がかたよっている。古墳時代前期のみで考えると、古市宮ノ谷山遺跡では、19・18号墳と連続して方墳が築かれており、その時期もⅦ～Ⅲ期あたりと考えられ、青木遺跡や日下古墳群と類似しているようである。また分布については、先述した群の捉え方も関係するが、青木遺跡や日下古墳群のようにいくつかの集団が併存した古墳群と考えれば、22・23号墳は別の群で、20号墳よりはじまる古墳群として評価できるかもしれないが、調査地外の部分もあるので、あくまで可能性に過ぎない。

## 2. 埋葬施設

### (a) 頭位方向<sup>(14)</sup>

3遺跡の頭位方向を比較したものが図153である。青木遺跡F地区古墳群で頭位方向が明らかな埋葬施設は4基あり、人骨、土器枕、石枕によって判別できた。東頭位が2基、西頭位が2基である。頭位方向の分からないものと合わせても、東西を軸とするものが多い。しかし、青木遺跡では丘陵平坦部に古墳をつくっているものもあり、この方向は尾根筋に沿っているだけとは考えられない。SX03・08・09と続く尾根筋に展開する古墳では、尾根の方向はほぼ南北であるが、SX03・09の埋葬施設は東西方向を向き、SX08のみ南北方向である。しかし、古墳の向きとの関係で見れば、SX09と同じである。また、西斜面ではSX01・04～06が築かれており、埋葬施設はSX06を除き、斜面の方向と並行する。古墳の向きとの関係も考慮に入れば、北の尾根では少なくともSX

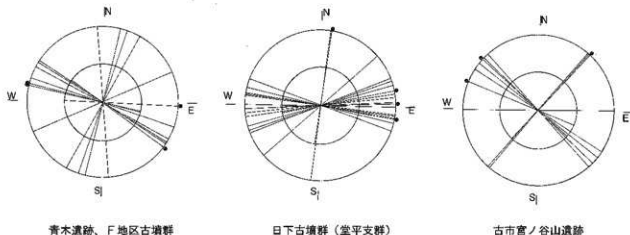


図153. 各古墳群における埋葬頭位

08、西斜面ではSX06の段階で変化しているのがわかる。

日下古墳群で頭位方向が分かる埋葬施設は4基あり、いずれも石枕によって判別できた。このうち45号墳の埋葬施設のみが北に頭位を向けており、あとは全て東に向けている。頭位方向の分からないものの中では、長軸が尾根筋に直交して南北いずれかに頭位を向けるものは35号墳の第1主体部のみで、あとは全て尾根筋に平行な東西方向に頭位を向けるものである。南北方向に向けるものは少なく、いずれもⅧ期に比定されている。

古市宮ノ谷山遺跡で頭位方向が明らかな埋葬施設は3基あり、土器枕、石枕によって判別できた。このうち18・22号墳の埋葬施設の長軸は尾根筋に平行しており、共に石枕が西側小口付近で出土している。20号墳では尾根筋に直交し、土器枕が北側小口付近から出土している。この他の頭位方向の分からない埋葬施設も大きく2つに分かれる。長軸が尾根筋に平行な、東西いずれかに頭位方向をもつものと、長軸が尾根筋に直交し、南北いずれかに頭位方向をもつものである。これらの差異は20号墳の例を見るように時期差とも考えられるが、南北方向のものが19・20号墳に限られることから一時的な変化を示しているかもしれない。

これらの古墳群の埋葬頭位は、特に日下古墳群と古市宮ノ谷山遺跡で見られるように、尾根筋に並行することを基本としていることがわかる。尾根筋に直交するものはわずかであるが、その角度の差異は尾根筋に並行するそれと比べて非常に小さい。こうした小古墳の頭位は、基本的には尾根筋という地形に制約され、並行するか直行するかのどちらかである。しかしこの角度の範囲差は、直交方向（南北方向）の埋葬施設には別の意味合いがあった可能性を示唆している。また、枕等から埋葬頭位が明らかなものでは、東頭位が主流である日下古墳群と西頭位がみられる古市宮ノ谷山遺跡で違いがみられる。両遺跡とも尾根筋が西へ伸びるという点で立地は共通しているが、埋葬頭位が異なるのは、また別の原則があるためだと考えられる。いずれにしてもⅦ～Ⅷ期段階に頭位方向の変化があり、特に古市宮ノ谷山遺跡では、丁寧なつくりの石棺の中に土器枕や鉄鏃を副葬しており、頭位方向の変化と何らかの関わりがあると思われる。

#### (b) 組み合わせ式石棺

次に、これらの古墳群でよくみられる埋葬施設である組み合わせ式の石棺を比較してみたい。最近、清家章氏が、畿内周辺の組み合わせ式石棺の型式学的検討を行い、その中で石棺の型式と集団についての関係を述べている<sup>(25)</sup>。この清家氏の研究で使用された分類基準の内、ここでは、床面構造、小口構造、側石の継ぎ方について検討することにする(図154)。また、これらの他にも規模や側石の枚数などの項目を追加してまとめたものが表25である。この表によると、床面構造と側石の継ぎ方で異なる様相がみられる。

床面構造では、礫床(砂利)がある青木遺跡、日下古墳群と、土で貼床をしている古市宮ノ谷山遺跡とに分けられる。床面構造は、清家氏が最も集団差を表す属性として評価している。しかし、床面に砂利や土を敷くような行爲を行っているのは古墳群全体の中では少数であり、単純に2つの集団と分けられるわけではない。そこで床面構造の異なる石棺の規模等を比較してみると、日下古墳群の砂利を敷く床面構造の石棺2例は、いずれも一般に未成人用と考えられる、長さ1.4m未満の石棺であり、内側にベンガラが塗られている。また、この内1基では同棺複数埋葬が認められる。これは特殊な事例であり、同じ礫床が認められる青木遺跡とは、その背景が大きく異なると思われる。規模がほぼ同じである点や土器枕をもつ点などからは、むしろ青木遺跡と古市宮ノ谷山遺跡との間に共通性がある。

側石の継ぎ方で異なる点は、日下古墳群や古市宮ノ谷山遺跡では平継ぎが主流であるのに対して、青木遺跡では重ね継ぎが多いことである。側石の継ぎ方の違いについて清家氏は、集団差、地域差よりも石材の性質によって規定されているものと考えている。石材については、古市宮ノ谷山遺跡では全て角礫凝灰岩であるが、青木遺跡、日下古墳群では石材について報告されていないため比較できない。

日野川沿岸の丘陵で採取可能と思われる石棺石材は、先述した角礫凝灰岩が流紋岩質凝灰岩であり、このうち後者は粘土化している部分が多く、前者の石材が使われた可能性が高い。そうすると、青木遺跡の石棺は、古市宮ノ谷山遺跡と同じ石材で継ぎ方が異なることになり注目される。ここで、側石の枚数と小口構造に注目してみ

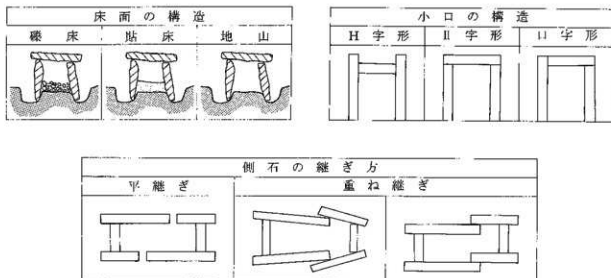


図 154. 組み合わせ式石棺の各属性

る。青木遺跡と古市宮ノ谷山遺跡の石棺を比較すると、規模はほぼ同じであるが、側石の継ぎ方が異なっており、それに対応するように側石の枚数と小口構造に違いがある。基本的に重ね継ぎは、棺の長さの調整、または側石の安定のために行う行為であり、1つ1つが小さく、厚さも薄く不整形な石を青木遺跡では使用しているようである。逆に古市宮ノ谷山遺跡では、安定感のある大型の石を使って側石をつくり、小口石を挟んで、小口石の端から余った長さを突き出すことによって長さを調整し、H字形の小口が形成されている。これは石棺のつくりかたそのもの違いとも言える。この違いの原因が、もし石材の違いでなかったとすると、おそらく石棺石材の原産地からの距離が影響していると思われる。つまり、古市宮ノ谷山遺跡では付近で石棺石材を採取でき、大型の

	規模 (m)	床面構造	小口構造	側石の継ぎ方 (枚数)	時期	その他
青木遺跡PSX01	1.8×0.39×0.39	礎床	H字形	重ね継ぎ (4+3)	Ⅷ期古	土器柱 (西頭位)
青木遺跡PSX03	1.7×0.35×0.2	礎床	H字形	一部重ね継ぎ (4+4)	Ⅷ期古	人骨残存 (西頭位)
青木遺跡PSX06	1.77×0.3×?	地山	II字形	重ね継ぎ (4+4)	Ⅷ期	
青木遺跡PSX09	1.6×0.39×0.18	地山	ロ字形	重ね継ぎ (5+4)	?	鉄器副葬
山下25号墳 (第1主体)	1.76×0.27×0.25	地山	II字形?	Y継ぎ (6+4)	Ⅷ期古~	
山下25号墳 (第2主体)	?	地山	ロ字形	?	Ⅷ期古~	
山下38号墳	0.97×0.34×0.3	礎床	H字形	重ね継ぎ (2+1)	Ⅷ期新?	ベンガラ付着
山下39号墳	1.38×0.34×0.37	礎床	H字形	平継ぎ (3+3)	Ⅷ期新	同棺複数埋葬、ベンガラ付着、石柱 (東頭位)
山下40号墳	1.58×0.42×0.32	地山	H字形	平継ぎ (6+5)	Ⅷ期新	刀子・土器副葬、人骨残存
山下44号墳	1.73×0.37×0.33	地山	ロ字形	平継ぎ (5+4)	Ⅷ期	石柱 (東頭位)、小玉副葬
山下45号墳	1.8×0.4×0.35	地山	H字形?	一部重ね継ぎ (4+4)	Ⅷ期	同棺複数埋葬、石柱 (北頭位)
古市19号墳 (埋葬施設1)	1.7×0.3×0.2	貼床	H字形?	平継ぎ (3-3)	?	鉄器副葬、側石は接合し (2×1) の可能性有り
古市19号墳 (埋葬施設2)	1.75×0.31×0.2	貼床	H字形	平継ぎ (4-3)	?	
古市20号墳 (埋葬施設1)	1.7×0.41×0.2	地山	H字形	重ね継ぎ (4-3)	?	
古市20号墳 (埋葬施設2)	1.68×0.35×0.3	貼床	H字形	平継ぎ (4+3)	Ⅷ期古	土器柱 (北頭位)
古市22号墳	1.87×0.44×0.4	地山	ロ字形?	平継ぎ (3+2)	?	石柱 (西頭位)

\*側石の継ぎ方の ( ) 内は、両側石それぞれ片方ずつの石の枚数を示す

表 25 組み合わせ式石棺の属性表

石材のままで運搬可能であったのに対し、青木遺跡では遠距離であったため、石材を分割して運搬せざるをえず、比較的小型の石材で棺をつくらなければならなかったことが想定できる。しかし、あくまで仮定であり、古市20号墳例の際に側石の継ぎ方が時期差を示す可能性もある。

### (c) 同棺複数埋葬について

組み合わせ式石棺や木棺の中で2体以上の人骨が見つかることがある。これは同棺複数埋葬と言われる。鳥取県の同棺複数埋葬については岡野雅則氏の考察がある<sup>(46)</sup>。それによると、西伯番では山間部の月賀6号墳が最古段階とされており、Ⅶ期新段階である。米子平野周辺では古墳時代後期になってから多くみられるようである。

日下古墳群ではⅦ期新段階の39号墳で、2体分の人骨が東西それぞれに頭位を向けた状態で検出され、Ⅶ期には45号墳で同じく2体分の人骨が埋葬されている可能性が指摘されている<sup>(47)</sup>。また、日下古墳群では木棺墓と石棺墓が対になって同じ墳丘から検出される例が多い。1基のみの埋葬施設でも墳丘の中心ではなく、隣に別の埋葬施設がつくれる空間をあけている例もある。人骨の鑑定を行った井上貴夫氏は、こうした様相と先の45号墳の人骨の検出状況と合わせて、まず木棺墓に遺体を埋葬し、その後石棺に遺体を移すという埋葬形式を想定している<sup>(48)</sup>。

古市宮ノ谷山遺跡では、17・18・22・23号墳のように、墳丘の中心に埋葬施設がなく、隣に別の埋葬施設がつくれそうなものがある。20号墳でも、古墳群中最大規模の二段墓壇をもつ埋葬施設2は、石棺と1段目の墓壇の中心がややずれており、もう1基つくりようとしたのかもかもしれない。しかし、19・20号墳のありかたは、一棺同時の石棺構築や、別の石棺を構築しての追葬という形で、同棺複数埋葬の原理とは大きく異なっている。日下古墳群と古市宮ノ谷山遺跡は時間的にも重なっており、こうした同棺複数埋葬を行う古墳とそうでない古墳との差異を、人骨等の資料を加えて考える必要があるだろう。

## 3. まとめ

さて、これまで述べてきたことをまとめると、①古墳群の中では、方墳と円墳で分布差や時期差があり、ある程度の集団が、墳形と分布範囲から抽出できそうである。また、そうした集団がいくつか集まってこうした小古墳群を形成している。②埋葬施設の頭位方向は、尾根筋に沿うような形が基本であるが、日下古墳群では東頭位、古市宮ノ谷山遺跡では西頭位を指向する。Ⅶ期～Ⅷ期あたりで、尾根筋に直交するものが現れ、特に日下古墳群と古市宮ノ谷山遺跡では北を向き、注目される。③組み合わせ式石棺の構造からは、礎床と貼床という床面の差異はあまり集団差には結びつかない。石材環境が似ているはずの古市宮ノ谷山遺跡と青木遺跡とで、側石の継ぎ方が大きく異なる。④組み合わせ式の石棺でよくみられる同棺複数埋葬は日下古墳群で前期段階から見られ、石棺の構造にも影響を及ぼしている。しかし、古市宮ノ谷山遺跡では逆に同棺複数埋葬を指向しない埋葬施設のつくり方がみられる。

以上の4つの項目が確認できた。特に注目できるのは日下古墳群と古市宮ノ谷山遺跡との差異である。両古墳群は、同じ西へと伸びる丘陵に立地しているにもかかわらず、埋葬頭位は全く正反対であり、同棺複数埋葬は日下古墳群でのみ確認されている。古市宮ノ谷山遺跡の西頭位は、渡辺貞幸氏が指摘した出雲地方の特徴と同じであり、山陰地方全体の特徴の可能性もある<sup>(49)</sup>。逆に日下古墳群の特徴は他地域からの影響が考えられる<sup>(410)</sup>。

古市宮ノ谷山遺跡では、Ⅶ期以降につくられた19・20号墳が埋葬施設、埋葬頭位、出土遺物等で特徴的である。このことは、先の古墳群との比較によって明らかとなった特徴とあわせて、この地域における弥生・古墳移行期の1つの両期とも言える。また、ここで触れることができなかった弥生墳丘墓や隣接する地域の古墳との比較を行えば、さらに様相が明らかとなるであろう。今後の課題としたい。

(下江健人)

註

- (1) 青木遺跡発掘調査団編 1976『青木遺跡発掘調査報告書』F・J地区』鳥取県教育委員会
- (2) 百郷信一 小原貴樹 藤原裕子 1992『日下古墳群発掘調査報告書』日下古墳群調査団
- (3) 近接する41・42・46号墳を加えても、方墳の方が多い。
- (4) 方位については北方向を真北として図示している。数値の書かれていないものや磁北を使用しているものについては、各報告書から筆者が測定、修正を行っている。なお、図示した頭位方向は中心的埋葬施設のみであり、周溝内や墳丘外のものには除外した。
- (5) 清家章 2001『畿内周辺における箱式石棺の型式と集団』『古代学研究』第152号
- (6) 岡野雅則 2000「第6章 1 鳥取県内における同棺複数埋葬について」『島古墳群 米里三之寄遺跡 北尾釜谷遺跡（北尾古墳群）』鳥取県教育文化財団 調査報告書64 財団法人 鳥取県教育文化財団
- (7) 井上貴央 1992「第5章第1節 日下古墳群より検出された古墳時代人骨について」『日下古墳群発掘調査報告書』日下古墳群調査団
- (8) (註7)と同じ
- (9) 渡辺貞幸 1999「9 まとめと若干の考察」『荒島古墳群発掘調査報告書・大成古墳4・5次発掘調査、塩津山墳墓群・若塚古墳測量調査』安来市埋蔵文化財調査報告書第27集 安来市教育委員会
- (10) 小古墳の東頭位については、宇垣匡雅氏によって吉備でその優位性が明らかにされ、同棺複数埋葬の初源については、辻村純代氏によって吉備地域が想定されている。また、同棺複数埋葬については、鳥取県内でも東部では前期の早い段階から行われている様である（岡野 前掲）。  
宇垣匡雅 2001「古備南部における古墳時代前半期小墳の埋葬頭位」『古代古備』第23集  
辻村純代 1983「東中国地方における箱式石棺の同棺複数埋葬 その地域性と社会的意義について」『季刊人類学』第14巻第2号

(図出典)

- 図151 米子市史編さん協議会編 1999『新修 米子市史 第7巻 資料編 考古 原始・古代・中世』米子市より再トレース
- 図152 各報告書より一部改変して転載 その他は筆者作成